

### 三 武田氏の治水と架橋

これまでみてきたように、戦国時代の前期には天竜川はしばしば洪水にみまわれ、架橋なども領主の手でなくて僧侶を中心とした勧進で行われていました。つまり領主の側では治水や架橋に積極的に関与しようとする態度を見せなかったのです。ところが信濃の戦国時代は、甲斐の武田氏の侵略およびその統治によって大きく変わりました。そこで、武田氏の統治下で天竜川の治水や橋作りがどのようになったかを、この章では述べていきたいと思います。そのためには先ず、武田氏が天竜川沿いをいかにして領有するに至ったかを確認しておいたほうが良いでしょう。

甲斐国を統一した武田信虎は次の目標を信濃に定め、享禄元年（一五二八）に諏訪に攻め入り、諏訪郡を統一していた諏訪頼満・頼隆父子と戦いました。その後も戦いを繰り広げましたが、天文四年（一五三五）七月一七日に信虎は諏訪頼満と堺川で和平の儀式を行いました。その後信虎は佐久郡に侵略の手を延ばしたのですが、天文一〇年に息子の晴信（後の信玄）に甲斐を追われて駿河の今川義元の

もとに赴きました。

武田晴信は天文一一年（一五四二）に諏訪侵略の行動を起こすことに決め、七月一日には高遠頼継軍と呼応した武田軍が長峰・田沢（茅野市）辺りに陣を取りました。二日本拠地である上原城（茅野市）に火をかけた諏訪頼重は桑原城（諏訪市）に入りましたが、七月四日には開城して降参しました。しかし翌日甲府（山梨県甲府市）に送られて二日に切腹させられました。その後武田軍は九月二五日に安国寺（茅野市）門前の宮川のほとりで諏訪郡全域の領有を目論んだ高遠頼継の軍を破り、諏訪郡全体を手に入れました。しかし高遠頼継は再び諏訪を攻略しようと機会を伺い、福与城（上伊那郡箕輪町）の藤沢頼親も彼と結んで武田氏に反旗を翻そうとしたので、晴信は天文一三年一〇月末、伊那に出兵して福与城の前進基地である荒神山城（上伊那郡辰野町）を攻めました。しかしこれを落すことができず、一二月九日に甲府に帰りました（信史一一二二八）。翌天文一四年四月一四日、上原城に着いた武田晴信は翌日杖突峠（高遠町と茅野市の境の峠）に陣を張りました。頼継はなすすべもなく一七日に城を捨てて逃亡しました。一八日に晴信は高遠に入り、二〇日には福与城の藤沢頼親を攻撃しました（信史一一三〇三）。しかし城は

要害の地形にあり、多くの人数が立て籠っていたうえに、頼親の妻の兄の深志（松本市）の小笠原長時が救援のため竜ヶ崎城（上伊那郡辰野町）に入ったため、落城させることができませんでした。その後、武田軍にも駿河の今川義元と相模の北条氏康の援軍が加わったこともあって、とうとう六月一日に竜ヶ崎城を落すことができました。一〇月一日、頼親も和議に応じ、翌日弟を人質に出し、城には火が掛けられました。晴信は一二日に小笠原長時の領内である塩尻（塩尻市）に兵を出したうえで甲府に帰りました（信史二一三二〇）。こうして上伊那も武田氏の勢力下に入ったのです。

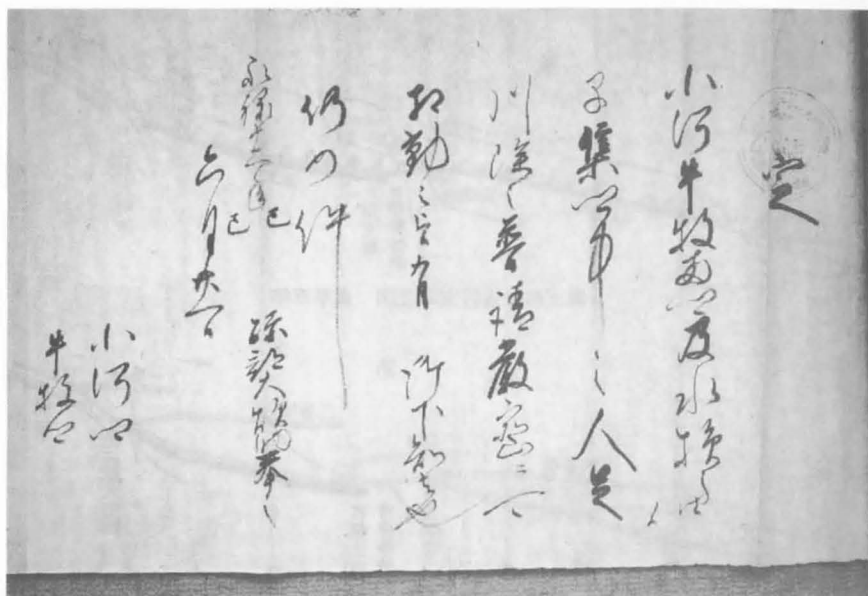
天文一七年（一五四八）七月十九日、武田軍は塩尻峠（塩尻市と岡谷市間の峠）の戦いで小笠原長時の軍を打ち破り、天文一九年七月には府中（松本市）をも支配下に入れました。その後、晴信が下伊那の制圧に着手したのは天文二三年でした。七月二四日、甲府を出発した武田軍は、天文三年ごろに小笠原長棟によって松尾（飯田市）を追われ、甲府に逃げていた小笠原定基の孫信貴を先方として、小笠原信定の鈴岡城（飯田市）を攻めました。信定や当時ここに留まっていた兄の長時らは防戦に努めました。が、衆寡敵せず遂に八月七日に城が落ちて、兄弟は下条へと逃れ

ました。そこで晴信は近隣の武士たちに出仕してくるようにと誘ったので、多くの武士たちはこの時に武田氏にくどりました。しかし神之峰（飯田市）の知久頼元だけは降伏しなかったため、武田軍は知久郷を攻撃しました。この攻撃によって城は落ち、知久頼元父子は捕らえられました。攻撃に際して八月一日に知久郷はことごとく放火されて、これまで度々触れてきた名刹文永寺をはじめとして付近の寺々も焼かれました。この状況を見て吉岡城（下伊那郡下条村）の下条氏も武田氏に臣従し、その他の武士たちもほぼ武田氏に服属することになりました（信史二二一一九）。こうして下伊那郡も武田氏の領国の中に組み込まれることになったのです（注一）。

このようにして諏訪から伊那郡全域が武田氏の支配に入ったことは、この地域の天竜川全体に武田氏が関わるようになったことを意味します。武田氏の天竜川治水の状況を伝える文書は次の一点が知られるだけですが、その内容は興味深いものです。

#### 定（武田氏の竜朱印）

小河・牛牧両郷水損に及ぶの由に候、早く郷中の人足を集め、川除の普請厳密に相勤むべきの旨、御下知有



3. 武田氏文書（喬木村小川 湯沢義朗氏所蔵）

るものなり。よって件のごとし。

永禄十二年（一五六九）己巳

六月二十一日

小河郷

牛牧郷

（信史一三—三一九 喬木村・湯沢義朗氏所蔵）

この文書は、小河郷（下伊那郡喬木村）と牛牧郷（下伊那郡高森町）の両郷に対して、「小河・牛牧の両郷が水害を受けたというのを聞いたので、早く郷中の人足を召し集めて、堤防の普請を厳密に勤めるようにと、武田信玄様から命令があった」と、跡部大炊助（勝資）が信玄の意を承って伝えたものです。

この文書に關係して『下伊那史』は、「信玄は川中島に駿河に上州にと、来る年も来る年も戦争にあげ戦争にくれた。このため多額の戦費を要したのであるが、その財源として、甲斐金山をはじめ、食料の増産については、甲府盆地を流れる釜無川・笛吹川等の天井川の氾濫を治める難事業を達成し、今日も尚『信玄堤』として知られているが、伊那においても牛牧・小川の水損地に川除普請を施工した記録を残している。ここ飯田盆地も甲府に似た天井川をも



龍王村付近信玄堤之図 貞享五年



龍王村付近信玄堤之図 寛政七年

#### 4. 近世の信玄堤の図（『近世科学思想 上』より）

つ地域であり、治水には甲州流堤防の築き方として、『聖牛工法』が伝えられているが、この方法は世界における最も優れたものであり、信玄は奔流を防止するとともに、この方法を戦陣にも用いたといわれる。」（注2）と記しています。つまり、この文書によってこの地域にも信玄堤が築かれたのであり、その特徴は天井川（実際には釜無川や天竜川は天井川ではないと思います）に対応する聖牛工法であったということです。信玄堤に対するこのような理解は、一般的なものと思われま。

そこで次にここにみられるような武田氏の治水について確認してみましょう（注3）。信玄堤の代表とされるのが、山梨県中巨摩郡竜王町地内に残る信玄堤です。これは天文十一年（一五四二）秋の釜無川の大洪水によって、甲州一円が大きな被害を受けたのに対処するために築いたものとされています。そして信玄堤と呼ばれる堤の特徴は、江戸時代に書かれた甲斐の地誌である『甲斐国志』に「皆雁行ニ差次シテ重複セリ」（注4）と記述されているように、河川に沿って築かれた堤防が所どころで切断された不連続の堤防（霞堤）として有名です。この霞堤では、洪水の時には堤防の



5. 現在の信玄堤 ー山梨県竜王町ー  
 (『甲斐の道づくり・富士川の治水』より)

切れ目から水が河川の外へ流れ出します。しかし堤防が切れてそこから直接に水が流出するのと違って、いわば間接的に水が溢れますので水の勢いが弱く人家や田畑の流出は免れます。現在の連続した堤防ですと、一旦堤防が切れ、そこから洪水の水が流れ出しますと、切れた場所以外には河川に戻る道がありませんので、流出した水は元の河川に帰ることができません。ところが不連続堤ですと、洪水がおさまると、流れ出ていた水は再び堤防の切れ目から元の河川に帰ることができます。したがって洪水の水は早く引くことになりません。このような工法が取られたのは甲州が山国であって川が急流であり、南部の方が低くなっている上、全ての水は最終的には富士川に流れ込まざるをえないという地形のために、流れ出た水が本流に帰ることができ



6. 御勅使川にある巨大な「石積み出し」(信玄にかかわると伝えられる)  
(『甲斐の道づくり・富士川の治水』より)

るといふ自然条件を、治水工事の施行者が熟知していたからです。平地の川ではこのような工法は効果をもたないのです。

竜王に信玄堤が築かれたのは、この場所で南アルプスから西から東へと流れてくる急流の御勅使川が、北から南へと流れている釜無川と合流していたために、自然のままでは西から大きな圧力を受けた釜無川も東に流れ、甲府盆地に多大な被害を及ぼしたからでした。南アルプスから一気に盆地中央にむかって流れてくる御勅使川は、普段はほとんど水のない川なのですが、一旦大雨になると激流となって駆け下り、釜無川の水をも巻き込んで大きな被害を甲府盆地にもたらしていたのです。そこで取られた方法の一つは御勅使川の流れの勢いを弱めることでした。このために御勂使川の上流の駒場有野(中巨摩郡白根町)で石の積み出しを出して、流れをやや北側に向け、竜王の赤巖(一名高岩)にぶつけようとしたのです。そしてこの大きな岩で流水を受け止め直接甲府に向かわせないようにと考えたのです。同時に六科村(中巨摩郡八田村)の西の方に石を用いて圭角の

堤塘（その形から将棋頭と呼ばれる）を築き、水勢を二分しました（注5）。そして別れた流れの一つが釜無川と合流する場所には八大竜王石（十六石三つ石など）と呼ばれる大きな石を並べて、水勢をそいだうえで、釜無川と合流させたのです。そしてこのような工法を取りながら、赤巖の場所に一の出し堤一〇〇〇間余を築き、次第に下流に雁行形に先に述べたような信玄堤を築いていったのです（注6）。これが一般に言われている信玄堤なのですが、一つの特徴としては巨石をうまく配置して水の勢いを弱めることをあげれるでしょう。これが事実なら石切りをはじめとして多くの職人も動員されたものと考えられます（注7）。先に確認したように『下伊那史』は聖牛工法を武田信玄が生み出したものとしています。寛政六年（一七九四）の跋を持つ大石久敬の『地方凡例録』には、砂石川に用いる川除として棚牛という工法を説明して、甲州釜無川・笛吹川・駿州富士川・安倍川・由井川・遠州天竜川などで用いているとしています。そして、元来棚牛・大聖牛・尺木牛・棚木牛・菱牛・尺木などは甲州で古来から用いられてきたもので、信玄が工夫した川除であるというように伝えられている、享保（一七一六〜三六）年中以前は甲斐以外ではあまり用いられてなかったとしています（注8）。この本

が書かれたのは信玄が死んでから二〇〇年以上も経ってからのことです。事実かどうかははっきりしません。ただ、こうした工法が近世に急流の石や砂の多い川で用いられたこと、江戸時代にはこのような工法が信玄が工夫したものとして理解されていたことは事実でしょう。『地方凡例録』の指摘が事実だとしますと武田氏の治水工法は地形に即したもので、先に見たような状況を含めて大変進んだものだったということができそうです。ただし、目下の状況は武田氏の治水については様々ながいわれている割にはしっかりした史料がなく、戦国時代の武田氏の行ったことが確実な治水の発掘事例もありませんので、今後まだまだ研究が必要で、場合によると通説も書き換えられる可能性があるということに注意しておきたいと思います。『下伊那史』の記述は、こうした武田氏の治水、特に信玄堤と称されるものと、小川・牛牧の両郷が作った川除とは同じものかどうかというのですが、はたしてこうした理解で良いのかどうかも実は再考を要することなのです。先の文書で明らかなのは武田氏が小川郷と牛牧郷に対して、水害を受けたと聞いているので早くこの二つの郷中の人足によって川除の普請を厳密にするようにと命じていることだけなのです。つまり、命令をしているのは武田氏なのですが、

これで見ると実際に治水の普請を行っているのはこの二つの郷の百姓であり、武田氏がこの治水に対して特別な技術や職人などを提供しているとは言えないのです。領主の側が自分の持つ技術者や他の地域の村々にまで普請を手助けさせたという記載は見る事ができません。治水のための設計図を武田氏が出したということも考えられません。この二つの郷は、この時に初めて水害を受けたものではないでしょう。恐らくこれより以前にも度々水害の経験はあり、それに対処する方法を知っていたものと思われれます。武田氏は、そうした経験を前提にして自分たちで治水をしろと命じているに過ぎないのです。

ところで、堤防の普請をした場所は何処でしょうか。『長野県の地名』の牛牧村の項では、『牛牧』の初見は永禄一二年、武田信玄が牛牧郷の川除普請を命じた記事(『武田信玄朱印状』湯沢文書)である。村の北を流れる大島川の氾濫によるものである。(注9)としています。しかし、水損を受けた場所が牛牧郷と天竜川を挟んだ対岸にある小川郷の二つで、この両者に川除普請を命じているのですから、治水の対象は天竜川で、川除普請をした場所も天竜川の堤ではないでしょうか。もし『長野県の地名』の執筆者の主張するようなことが事実だった場合でも、

大島川が天竜川に合流しても、天竜川の流れを大きく変化させるほどではなかったでしょうし、武田氏が築かせたという先にみた竜王の信玄堤などのように、信玄の住む甲府が直接被害を受けるといったことはなかったはずです。武田氏が甲府を守るために築かねばならなかった竜王の信玄堤の場所程には、この地域は武田氏にとって重要性もなく、それほど力を入れねばならぬ必然性をもった場所でもないと思われれます。

それでは先の小川郷・牛牧郷に川除の普請を命じた最大の意義は何処にあるのでしょうか。この二つの郷およびその付近が、武田氏が直接支配していた御料所とは限らないということです。つまり、武田氏以前の信濃の領主でしたら、自分の直接的に支配している場所以外においては治水をしようとしても、地域の領主の領域に手を延ばすことはできなかったのですが、武田氏はそうではなくて、自分の直接支配していない場所にまで手を延ばすことをしたのである。例えば、先に見た竜王の信玄堤の場所はその広さと、信玄堤といわれる工事の規模からして、武田氏の御料所内だとは到底考えられません。工事をした場所は多くの領主の領地に関わっていたでしょうし、工事のために動員された人々も、多くの領主の領内を通じての広い範囲の住民だっ



たはずで。治水というのは狭い範囲にだけ行っても駄目なのです。流域全体を見通して、広域にわたってこれを行った場合に初めて効力をもちうるのです。そのためには、何人かの狭い範囲の領主の上に立って、均一的な施策を行い、多くの人間や技術者を動員できるような権力がなくてはなりません。武田氏はまさしくそのような役割を負っていたのです。

信玄堤ができることによって、甲府は水害から逃れることができます。これによって武田氏の安全もはかれます。また農業に対する洪水被害が減りますので、各領主たちは安心して戦争に行くこともできます。当然百姓たちは安心して作物を作ることができ、生産も安定します。武士は百姓からの年貢などで生活していますから、農業生産が安定すればそれだけ安定した生活を送れます。そうなれば武田氏としても配下の武士たちに軍役をかけやすくなります。その上、治水工事を通して配下の領主たちの領域の中にも権力を伸ばすことができます。こうして武田氏にとって治水は大変大きな意味をもつことであり、それは地域の領主にとっても、民衆にとっても大事だったのです。このような意義を治水がもっているとする、これは甲斐のみに限らずに行われるべきことです。

天正七年（一五七九）一〇月二十七日、武田勝頼は信濃の佐久郡の依田信蕃に駿河の孕石和泉守の私領である藤枝岩寺分（静岡県藤枝市）の堤の普請を命じています（信史一四一四六〇）。そして今後とも破損した場合には再興するようにさせています。このことは大変注目される事実なのです。というのは信濃の依田信蕃は孕石和泉守の個人の所領にかかわる場所の堤普請を武田勝頼によって命ぜられ、これをしなくてはいけなくなっているということです。この場合治水の総責任者は所領を与えた武田勝頼であって、所領を持つ孕石和泉守ではないのです。勝頼はこれを依田信蕃という本来の根拠地を信濃に持つ武士に命じたのです。ここには領国全体の治水の総責任者としての武田氏の姿が出ています。そして、勝頼の態度には当然治水はしなくてはならないものだという意識が見られるのです。

小川郷・牛牧郷に治水を命じたのも、この孕石氏の所領の藤枝の場合と同じだったのではないのでしょうか。武田氏が御料所として直接押えていない場所であっても、治水というような領国全体にかかわることは武田氏が号令をかけました。ここではそのこと自体の持つ意味が大きいのだと私は考えるのです。

なお、小沢万里氏は「甲州流防河法と天竜川治水につい

て」で、武田氏の伊那支配の拠点になった大島城（下伊那郡松川町）のすぐそばの竜ノ口の対岸河野の一ノ刈（下伊那郡豊丘村）に見ることができると指摘しています（注10）。確かに山梨県の竜王町の信玄堤によく似た地形ですが、これをもって確実に信玄堤といえるかどうかは史料がありませんので決定できません。ただし、大島城という武田氏にとって下伊那支配のために最も大事な場所の近辺ですから、これが信玄堤につながる可能性は大きいと思います。

武田氏は治水だけでなく天竜川に橋も架けたようです。『上伊那郡史』には、「武田氏の伊那平定後は、軍事用として各方面への道路経営にも注意し、天正三年勝頼の長篠城を囲むにあたっては、二万の大軍の軍需品をば悉く信濃に徴発して運搬せしめ、飯島より新野（下伊那）までは車馬絡繹たりしと云ふ。」（注11）としています。恐らくこのことに関係するのですが、日下部新一氏は「天正三年（一五七五）春、武田勝頼は三河へ討って出るとき、殿島の渡しに橋を架けたと伝えられる。冬の渇水期を過ぎた頃であるから、仮橋を架けることはできたであろう。万をもって数える軍兵を渡すには渡船では日数がかかってしまう。仮の土橋を架けるにはさほど日数もかからないから、この

話はかなり信憑性がありそうに思える。」（注12）と記述しています。このことが事実だとしますと、この時に架けられたのは軍事用の橋で、一般民衆の通行用のものではないようです。しかしこのように橋を短期間で架けられるようになったということ、もしくは架けさせたということ自体が大変大きな意味をもつことだと私は考えます。

ともかく、以上見てきたように戦国大名武田氏が伊那郡を支配するようになると、天竜川の治水や架橋に直接関わるようになったのです。一章・二章で触れたように、武田氏が入ってくる以前の信濃では小さな領主たちが争い、その領域のなかでも大規模な治水などは行われていませんでした。領主たちは比較的狭い領地、いわばモザイクの一部の支配しかしていなかったのです。ところが武田氏は天竜川の流域全体を支配する、いわば一枚の絵画の面全体の支配の体制を整えましたので、たとえ家臣の領地内であっても治水のために人間を動員したり、堤防の建設などに当てることができるようになっていたのです。そして、それまでの領主の権力の大きさからみるとはるかに大きなものになっており、郡全体、あるいは国全体に号令をかけて普請のための人足を徴発することができるようになっていました。洪水などはたとえ天竜川の川辺に住んでいない人間で

あっても何時みまわれるか分かりませんし、それ以外の災害にも何時襲われるか分かりません。武田氏の領国内に住む人々にとっては治水工事にかかわるということは、見方を変えたと御互い様だというような側面もあったのです。そしてそのような災害に対処するためには武田氏のような大きな権力が民衆の側にとっても必要でした。信玄堤を築いたのはあくまでも民衆の力であって、信玄が土を運んだり石を並べたわけではありません。しかしこのようなことのために人民や職人などを組織して計画を立て、人足を動員して実際に治水工事を行った点に戦国大名としての意義があるのです。そしてそれゆえに信玄堤といった名前が残っているのです。

## 注

1 武田氏の信濃侵略の過程については、拙著『戦国大名武田氏の信濃支配』（名著出版・一九九〇）を参照していただきたい。

2 『下伊那史 第七巻』三七頁（下伊那誌編纂会・一九八〇）、執筆者は塩沢正人氏

3 武田氏の治水については、琴陵重鑑「武田氏治水事業の一斑」（『歴史地理』三三巻一号・一九一九）、広瀬

広一「武田信玄の治水工役」（山梨県師範学校・山梨女子師範学校共編『綜合郷土研究』山梨県・一九三六）、大庭実「武田氏による釜無川河道の改修について」（『駒沢史学』一号・一九五三）、清水小太郎「武田信玄の治水」（『甲斐史学』九号・一九五九）、同「信玄公治水事業の構想」（『武田氏研究』二号・一九八八）、柴辻俊六「竜王河原宿成立の意義」（『甲斐史学』特集号・一九六五）、同「所謂『信玄堤』修築当時の新資料について」（『日本歴史』二七六号・一九七二）、同「戦国期の水利灌漑と開発」一一号・一九七三）、中村正賢「武田信玄と治水」（山梨県林業研究会・一九六五）、安達満「初期『信玄堤』の形態について——最近の安芸・古島説をめぐって——」（『日本歴史』三三五号・一九七八）、同「甲斐における治水体制の一考察——武田時代から近世前期への推移——」（『法政史学』二九号・一九七七）、同「釜無川治水の発展過程」（一）（二）（『甲斐路』三〇・三一号・一九七七）、同「川除口伝書」にみる甲州流治水工法」（『武田氏研究』二号・一九八八）、『甲斐の道づくり・富士川の治水』（建設省関東地方建設局甲府工事事務所・一九八九）などがある。

- 4 『甲斐国志』卷之二十八
- 5 将棋頭に関しては、宮沢公雄「将棋頭遺跡の調査と課題」(『武田氏研究』二号・一九八八)、畑大介「竜岡将棋頭について」(『武田氏研究』二号・一九八八)がある。
- 6 こうした概略については、『竜王村史』一五七頁(竜王村・一九五五)、安芸皎一「信玄堤」(古島敏雄・安芸皎一校注『近世科学思想』上巻四九八頁(岩波書店・一九七二)がある。
- 7 拙著『戦国大名と職人』(吉川弘文館・一九八八)
- 8 大石久敬『地方凡例録』巻之九上(大石慎三郎校訂・近藤出版社版下巻二二二頁・一九六九)
- 9 『日本歴史地名大系第二〇巻 長野県の地名』四四九頁(平凡社・一九七九)、執筆者は石川正臣氏・今牧久氏
- 10 小沢万里「甲州流防河法と天竜川の治水」(『伊那』五八七号・一九七七)
- 11 唐沢貞治郎『上伊那郡史』八八六頁(上伊那郡教育会・一九二二)
- 12 日下部新一『天龍川の橋』八頁(建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所・一九八九)